

学び方を養う 学校図書館の指導

増田 信一 著



学び方を養う 学校図書館の指導

増田 信一 著

著者略歴

増田 信 一 (ますだ しんいち)

1933年 長野県に生まれる
1957年 東京学芸大学国語科卒業
現在 東京学芸大学附属大泉中学校教諭
日本読書学会常任理事
日本国語教育学会理事
国語教育実践理論の会中央委員
東京学芸大学国語教育学会監査
東京都中学校図書館研究会幹事

主な編著

1970 「中学生の本棚全30巻」(学習研究社)
1974 「中学校図書館ハンドブック」(第一法規)
1975 「今昔物語」(ポプラ社)
1976 「子どもの読書歴の研究」(日本教育科学研究所)
1982 「読書感想の指導」(学芸図書)
「読書指導と学校図書館の利用 Q & A」(第一法規)

現住所 東京都練馬区貫井4-17-26

学び方を養う
学校図書館の指導

定価 1800円

昭和58年5月16日 初版発行
昭和58年12月25日 第2刷発行

検印省略

著者 増田 信 一
発行者 学芸図書株式会社
代表者 市川 庚 一 郎

発行所 学芸図書株式会社
〒101 東京都千代田区神田小川町2-1
電話 03(291)3023・3887
振替東京 9-96491

1001 ISBN4-7616-0075-6 C3000 ¥1800E

は し が き

学校教育の中で学校図書館がどのような位置を占め、どのような役割を果たさなければならないのかという問題については、意外なほど共通理解がない。学校図書館を学校教育の中核にすえ、教育のあり方を根本的に変えていこうとする動きはかなり前から存在したが、論だけが先行して、実践がともなわなかった傾向がある。

現在の学校教育は、このままでは崩壊してしまうのではなかろうかという声は、教育関係者だけでなく、大きな社会問題になりつつある。家庭内暴力や校内暴力の根本的な解決をはかるためには、今こそ学校教育のあり方——学校図書館のあり方——について考える必要がある。学校図書館が「物置図書館」や「貸し本屋図書館」の状態を続けている限り、本質的な解決はもたらされないと私は信じている。

学習者自身が、学習意欲に満ち満ちて、学習目標を達成するためには、「学び方」をしっかりと身につけさせなければならないし、学習者の要望に答えるための学校図書館が整備されていなければならない。一人一人の学習者の要望に即応するための学校図書館は、「学習センター」としての機能を備えていなければならないのである。

学習者自身が主体的な学習を展開していくためには、教科書教材だけではもの足りなくなるし、教師も現在のように教えこむことに重点をおいてはいられなくなる。学校教育を再建するためには、「学習者論」を中心として、「学習目標論」「教材論」「教師論」などが再検討されなければならない。そして、それらと密接な関係を持つべき学校図書館のあり方についても、再検討される必要があるのである。

私は長い間、学校図書館をどのようにしたらよいかということについて、研究や実践をしてきた。特に、5年前から青葉学園短期大学主催の「学校図書館

司書教諭資格認定公開講座」で、「学校図書館の利用指導」の講座を担当させていただいているので、学校図書館のあるべき姿について、以前よりもっと深く考えることになった。この書は、青葉学園での講義録の集約であるといってもよい。

私は、機会あるごとに、小学校や中学校図書館を参観するように心がけてきた。自分自身が学校図書館を経営していく上で、より多くの学校図書館を見ておくことは、とても参考になるし、参観して得たことのうち自分の勤務校で生かせることは何でも実践してみることにした。そうすることによって、私自身の学校図書館に対する理想像をより明らかにしたかったのである。

私は、昭和54年の10月と11月の2か月にわたって、沖縄へ教育指導員として文部省から派遣され、多くの小・中学校を参観する機会を得た。その結果、現在のところ、日本で学校図書館がいちばん進んでいるのは、沖縄であるという感を強くした。本書の巻末に、沖縄の屋良小学校の「読書旬間指導計画」を載せさせていただいたのも、その一端を紹介したいためである。

本書の出版にあたって、多くの先輩や学校図書館の研究仲間にご指導とご助言をいただいた。特に、第Ⅲ章以下の実践事例は、青葉学園での講義に対する答案として出てきたものがもとになっている。受講者の皆さんに厚くお礼申し上げます。また、学芸図書株式会社の編集部の方々には一方ならぬご尽力をいただいた。合わせてお礼申し上げます。

昭和58年4月

増 田 信 一

目 次

はしがき

Ⅰ 学校教育の崩壊を防ぐ

1 教科書中心の教育の仕方の行きづまりを正す

- 1 教科書中心の教育は教師を主役にする9
- 2 教育の主役は子どもたちである10
- 3 教材構成の仕方を変えていく12

2 テストによって学習者をしぼる体制を考える

- 1 テスト万能主義が教育をゆがめている14
- 2 やる気を起こさせる向上評価を提案する16
- 3 レポート学習を推進する18

3 家庭における親子読書を盛んにする

- 1 家庭における親子関係の崩壊21
- 2 親子読書の実態23
- 3 家庭読書の推進24

4 新しい学校図書館のありかたを考える

- 1 校内暴力の日常化27
- 2 楽しみ読みの場としての学校図書館の確立28
- 3 学校図書館利用指導の歩み30

Ⅱ 教育を変革させるための視点

1 「教師が□を教える」から「学習者が□して学ぶ」へ

- 1 「学習」と「勉強」との違い33
- 2 学習者主導型の授業のための教材研究のあり方34

3 教師は補助的な立場を貫くこと	38
2 貸し本屋図書館から学習センターへの試み	
1 戦後の学校図書館の流れの概観	41
2 学習センターへの模索	43
3 教材作成上の工夫	46
3 目的意識をはっきりさせた学習の成立	
1 学習者自身の学習目標を大切にすること	49
2 生活学習的な要素を取り入れていくこと	51
3 合科学習的な柔軟な体制を整えること	53
4 学び方を養う場としての学校図書館	
1 教材を生み出すための学校図書館	60
2 学び方を養うための具体的な活動	62
3 具体的な活動を促す学校図書館	63

Ⅲ 図書館・図書資料の利用に関する指導

1 図書館資料の種類や構成を知って利用する	
1 学校図書館の本に親しむ	66
2 図書館資料の指導の具体的な内容	68
3 本の扱い方——小学1年——	73
2 学校図書館の機能と役割を知って利用する	
1 学校図書館に興味や関心を持つ	74
2 学校図書館利用の指導の具体的な内容	76
3 図書館の使い方と資料の生かし方——小学3年——	81
3 公共図書館等の機能と役割を知って利用する	
1 公共図書館を効果的に利用する	83
2 公共図書館利用の指導の具体的な内容	85
3 公共図書館の利用——小学6年——	87

Ⅳ 情報の検索・利用に関する指導

1 図鑑の利用に慣れる

- 1 情報処理の入門期指導として図鑑をとらえる……………89
- 2 図鑑の指導の具体的な内容……………91
- 3 冬の生きものについて調べる——小学3年——……………94

2 国語辞典・漢字辞典などの利用に慣れる

- 1 辞典利用の生活化をはかる……………96
- 2 国語辞典・漢字辞典の指導の具体的な内容……………98
- 3 国語辞典・漢字辞典の利用——小学4年——……………102

3 百科事典・専門事典などの利用に慣れる

- 1 自分の力で疑問を解決する……………105
- 2 百科事典・専門事典の指導の具体的な内容……………107
- 3 学習百科事典の使い方——小学4年——……………110

4 年鑑等の利用に慣れる

- 1 身近な問題について考える……………112
- 2 年鑑等の指導の具体的な内容……………115
- 3 私たちの生活と近代工業——小学5年——……………117

5 図書資料の検索・利用に慣れる

- 1 図書資料を情報としてとらえる……………119
- 2 図書資料の検索と利用の具体的な方法……………122
- 3 東京のいろいろな地域——小学4年——……………125

6 図書以外の資料の検索・利用に慣れる

- 1 図書以外の資料を身近な存在として利用する……………127
- 2 図書以外の資料の検索・利用の具体的な方法……………128
- 3 情報を正しく活用する力を養う——中学2年——……………132

7 目録，資料リストなどの利用に慣れる

- 1 資料の効果的利用の仕方を工夫する134
- 2 目録，資料リストなどの利用の具体的な方法135
- 3 修学旅行の事前研究——中学3年——137

V 情報の収集，組織に関する内容

1 必要な資料を集める

- 1 テーマに合った資料をさがし出す139
- 2 必要な資料を集めるための具体的な方法140
- 3 林間学校のしおり作り——小学5年——142

2 記録のとり方を工夫する

- 1 ノートのとり方を工夫する143
- 2 研究ノートのまとめ方の具体的な方法145

3 資料リストを作る

- 1 中身の濃い資料リストを工夫する146
- 2 資料リストを作るための具体的な方法148
- 3 戦争と平和について考える本のリスト作り——中学2年——150

4 資料のまとめ方を工夫する

- 1 目的に応じて資料のまとめ方を工夫する152
- 2 資料のまとめ方の具体的な方法153
- 3 複数の資料を使って研究報告をする——中学1年——155

5 伝達の仕方を工夫する

- 1 効果的な伝達方法を考える156
- 2 伝達の仕方の具体的な方法157
- 3 夏休みの登校日8月6日から——中学1年——159

6 資料や報告の保存の仕方を工夫する

- 1 価値ある資料や報告を保存する162
- 2 資料や報告の保存の具体的な方法163

Ⅶ 生活の充実に関する内容

1 望ましい読書習慣を身につける

- 1 読書することの意味を認識する165
- 2 望ましい読書習慣を身につけるための具体的な方法167
- 3 読書感想画による読書クイズ——小学2年——170

2 集団で読書の活動を楽しむ

- 1 協力し合って集団で読書を楽しむ171
- 2 集団で読書するための具体的な方法173
- 3 この本を読んでください——小学2年——174

3 読書活動を中心とした集会活動に参加する

- 1 価値ある集会活動を実施する176
- 2 読書会を進める上での具体的な方法177
- 3 学校代表による読書会の例180

4 読書活動を中心とした学校行事に参加する

- 1 充実した読書週間を持つ185
- 2 読書週間の具体的な行事とその方法186
- 3 読書旬間の具体的な事例188

あとがき192

索引194

I 学校教育の崩壊を防ぐ

1 教科書中心の教育の仕方の行きづまりを正す

1 教科書中心の教育は教師を主役にする

明治5年に学制がしかれて以来、学校教育は教科書とともに発達してきた。最初のころは、教育制度そのものが整備されていなかったのも、教科書の内容もあまり整っていなかったが、時代が進むに従って、教科書がその時代の教育をリードするようになっていった。

教科書中心の教育では、教師の立場が大きくなってくる。教科書教材を教師が事前に研究し、それを児童・生徒にどのように与えるかということが、最大の関心事となるからである。国定教科書の時代は、一つの教科書が長い間使われ、教材研究以外にも教師の目は向けられたから、指導法の開発も盛んであった。ところが、戦後の検定教科書時代になると、教科書は3年ごとに変わるので、教師は教材研究に追われ、それ以外の研究に時間を費やしにくくなった。

戦前の教育では、国定教科書であったために、教科書そのものの内容を教えこむことに教育の中心があったが、戦後の教育では、文部省から告示された学習指導要領の内容を具体化するために教科書が作られ、教科書で学習指導要領の示す事項を身につけさせることになった。「教科書を」から「教科書で」への転換は、学習者の存在を大きくクローズアップする上で役に立った。しかし「教科書で一人一人の子どもの学力を養う」ということは、そう簡単なことではなかったし、いつの間にか「教科書で」という認識が薄らいで、「教科書を」という考え方が復活するようになり出してきた。

この傾向は、昭和52年版の学習指導要領が告示され、各教科の授業時間数が減らされるに及んで、一段と強まり出した。限られた時間の中で、教科書教材

だけをしっかりと教えこもうという考え方の復活である。子どもたちの学力を向上させるためには、どのように単元を構成し、どのような教材を使って教育したらよいだろうかという問題が、教科書教材をどうこなしたらよいだろうかということと、すりかえられてしまうようになり出したのである。

2 教育の主役は子どもたちである

ここで、教育における主役は、誰なのかということについて、考えておく必要がある。戦前の教科書中心主義の教育にあっては、教科書教材が主役であり、教師はそれを伝達し、理解させるための存在であった。戦後の教育においては、教師が教科書をどのように料理し、わかりやすく教えこむかという点に関心が集まり、教師が教育の主役となった。いずれも、学習者である子どもたちを軽視した考え方に捕らわれていたのである。

私は、教育における主役は、学習者である児童・生徒以外にはあり得ないと思う。教科書が主役であったり、教師が主役であったりする限りは、学習者自身は脇役的な立場に閉じ込められてしまう。このような状況においては、主体的な学習意欲がわいてくるはずはないし、自分から学習に取り組もうとする積極さも、出てくるはずがない。ごく一部の「ぶりっ子」が教師に合わせておつきあいしようという態度を示すに過ぎない。

主役である子どもたちが何を望んでいるのかということを第一に考え、何も望んでいないときには望むようにしむけていくのが、教師の役割であるはずである。子どもたちは、勉強しようという気持ちに満ち満ちて登校してくるわけではない。学校に行かされるから、なんとなく来ているのだといってもよい。このような子どもたちに対して、一時間目はどの教科、二時間目は別の教科とるように、時間ごとに違う教科が待ち受けているのであるから、子どもたちは、おつきあいさせられるという気持ちがますます強くなっていくのである。このような気持ちは、小学校時代にはあまり強くないが、中学校・高等学校と進むにしたがってはっきりとしてくる。自我意識の芽生えとともに強くなっていくのである。

自分の得意の教科ならばまだよいが、不得意な教科の場合には、なぜこのような勉強をしなくてはいけないのかなという疑問が生じてくるし、それが壁となって、その教科の授業に素直に入りこめないようになってしまう。教師はこの壁を取り除けるように援助してやらなければならないのに、ほとんどの場合、気がつかないか無視したままで、通り過ぎてしまう。このような状態では、学習者が主役であるとは言えなくなってしまう。

学習者が主役であるとはいっても、何を学習してもよいというわけではなく、学習指導要領によって規定された「教育目標」や「指導事項」によって、学べき内容が限定されてくる。子ども自身の欲求と、教育目標から見て、教科書教材の内容が一致しない場合には、当然のこととして、教科書教材に代わるべき教材を、教師が用意してやる必要がある。そうでない場合にも、一学級における学力差はかなりはっきりしているから、教科書教材では満足できない成績上位生や、その教科書教材にはとてもついていけない成績下位生に対して、同一の教科書教材だけで教育しようとするのは、明らかに間違っているし、学習者無視の行き方になってしまう。

この傾向は中学校や高等学校において顕著になる。戦前の義務教育は、小学校の6年間であったからまだよかった。戦後の新教育になって、中学校3年間までが義務教育になり、昭和30年代の高校全入運動によって、9割以上が高校に進学するようになってから、この傾向は一層強くなった。高校の数が増えたからといって、子どもたちの知能や能力が、それに比例して高くなっていくはずはないから、学力低下論が起こるのは当然のことである。

ところが、中学校や高等学校の学習指導要領の内容は、このような実態に対応していない。高校教育の複線化ということは話題にはなるが、その実は上がっていないし、中学校教育の複線化は、一部の識者を除いて話題にすら上がっていないのである。このような状況の中で、落ちこぼれが生じていくのは当然のことであるし、それを放置している現在の学校教育は、早急に是正されなければならない。

教育の複線化ということを考えるとき、教科書教材だけに頼っていたのでは、

教育が成立しないということが、はっきりしてくる。教材についても複線化が考えられなければならない。教材を複線化すること自体は、学校図書館の資料に頼らなくても可能である。複数の教科書を作れば間に合うはずであるが、教科書検定の実態からすると、簡単に実現しそうもない。まして、一人一人の学力差に応じた教材を用意するとなると大変である。

私の勤務校には、外国に長期間滞在していた帰国子女が多数いるが、このような子どもたちの場合には、ことは深刻である。日本語が全然わからない者、会話は日本語でできるが文字は読めない者、ひらがなは読めるが漢字は読めない者、文字そのものはかなり読めるが意味内容までは理解できない者、論理の組み立て方が外国流で日本的な論理についていけない者などに対応するのに、一つの教科書教材だけで教育していくのはとても無理なことである。

最近では、能力差に応じた教育の必要性が叫ばれるようになってきているが、教材面について考えてみると、まだまだ何も解決されていないといっていよい。教材面の多様化が進められない限り、一人一人の子どもに対応する教育は実現できないし、教育の主役は子どもであるということも、机上の空論に終わってしまうことになる。

3 教材構成の仕方を変えていく

教育の主役は子どもたちであり、その方向づけをするのが、学習指導要領に基づく教育目標であり、それを援助しコントロールしていくのが教師であると考えるとき、教材をどのように構成するかということが大きな関心事となる。教科書教材だけに頼ってはいけないということは既に述べた。そうなれば、教師が教材を自分で作り出していくしかないのである。

教材について考えるにあたって、その前提として、単元構成の仕方が問題になる。単元構成の仕方にはいろいろな段階があるが、私は次の三層構造の構成の仕方を考えている。

- ① 基本学習（基本教材） その単元で中心的に養うべき能力についての学習。教材は教科書教材を使う場合が多いが、教科書教材が学習者の実態に

合わない場合には、他の教材と代えなければならない。例えば、「漢字辞典の引き方について学習する」という単元の場合、基本学習では、漢字辞典の構成・部首索引・音訓索引・総画索引などについての知識を獲得し、一つ一つの漢字の調べ方を理解することに重点が置かれる。この基本学習では、一斉での活動が中心となり、一部、個別での活動がまじる。教材としては、教科書教材のほかに、漢字辞典の利用・TP(トラペン)の利用・模造紙に書いた資料の利用などがある。

- ② 練習学習(練習教材) 基本学習で得た知識や技能の定着をはかる学習。作業課題や作業プリントによって、学習が進められていく場合が多い。上にあげた「漢字辞典の引き方について学習する」という単元の場合、漢字辞典を実際に引くことが活動の中心となる。この練習学習では、実際に辞典を引く個別での活動が中心となるが、それを促進するためのグループの活動が並行して行われる。一人一人の子どもに対して、教師が援助の手を差しのべる必要も生じてくる。活動そのものが単純であるから、ゲーム化したり、競争するような場合があってもよい。練習学習の場合、一単位時間だけでなく、ある期間継続して行うことが必要になってくる。
- ③ 発展学習(発展教材) その単元で養った能力を発展させ、生活化させる学習。単元の内容によって違うが、発展読書をしたり、作文活動をしたりする。上の漢字辞典の学習の場合には、特定の漢字についての漢字辞典作りや、教科書教材にでてくる漢字の「音訓・意味・熟語・類似語との比較・その漢字を使った例文作り」などが行われる場合が多い。

学力の定着をはかり、積極的に学習に取り組ませるためには、このような単元構成を單元ごとに工夫していく必要がある。教科書教材をそのまま流していくという指導の仕方から見れば、根本的に違った発想であるし、教師の事前の準備も大変であるが、子どもが主役であるという立場を貫くためには、是非このような学習を展開したいものである。

このような学習を経験した子どもたちは、漢字についての知識は豊富になり、漢字に対する抵抗もなくなっていくし、漢字辞典に対して愛着を持つよう

になっていく。日本語表記に漢字が使われる以上、漢字に対して親しみを持って使いこなす態度を養うことは、とても大切なことである。それだけでなく、漢字辞典の引き方を身につけることによって、他の辞典や事典などに対しても、なじもうとする姿勢が形成されていくことになる。「漢字辞典の引き方について学習する」という単元にとどまらず、すべての単元において、このような工夫がなされていけば、学習者自身の主体性も引き出せるし、その単元で学習したことが、その人の生涯を通じて役立っていくことも可能になる。

教科書教材だけに頼るのでなく、教師自身が単元構成を検討し、教材の構成を考えていくということは、一人一人の子どもを大切にすることだけでなく、教師自身の主体性をも確立することに通ずる。教育の主役は子どもであるといっても、教師の立場は弱まるわけではない。子どもが主役であるからには、教師は脇役であるのだが、主役を引き立たせ、十分な活動をしてもらうためには、脇役としての教師の役割も、再認識されなければならない。

教科書教材を無視するのでなく、教科書教材をより生かすためにも、教師の教材再構成は欠かせぬことである。よりよい教材を生み出していくためには、その根底として、学習センターとしての機能を持つ学校図書館が存在しなくてはならない。教師がいくら優れた教材を生み出そうとしても、その材料となる資料源がなくては実現できない。現実の学校図書館が、それに対応しうる体制を整えているかということになると、はなはだ疑問である。学習センターとして、学校図書館は生まれ変わらなければならないのである。

2 テストによって学習者をしぼる体制を考える

1 テスト万能主義が教育をやがめている

最近、子どもたちの個性が失われてきたということをよく耳にする。特に、共通一次テストのために、個性のない大学生が増えてきたということが話題になっている。私は、昭和56年度の後期に、東京学芸大学で国語科教育の講座を